

李塈の立場

——顏李學派の再考のために——

李塈（恕谷：一六五九—一七三三）は、清朝初期のやや特異な思想家・顏元（習齋：一六三五—一七〇四）の弟子として知られ、専ら師説を顯彰し、その普及に努めたことから、一般には、彼の繼承者として認知され、回顧される存在である。思想史上、顏李學派といった呼稱が通行する所以でもある。

しかるに、兩者の思想の間には、かなりの徑庭があり、復古的で原理主義的な志向の強い顏元に對して、李塈の場合、むしろ概ね穩健な主張が、その思想の基調となっている。小論では、従來の評価の再検討と同時に、考證學などの交差、それらを繋ぐ補助線について、少しく私見を纏めてみたい。

伊 東 貴 之

一、顏李學派とは何か？——如何にして形成され、回顧されたか？

まず、いわゆる顏李學派として、通常、認知されている人物につき、以下、少しく概観してみよう。

後述するように、往事における影響力の相対的な稀少さから見て、學派と稱すること自體の可否は、暫く措くとして、その濫觴に位置付けられる顏元は、字は易直、渾然、號は習齋、河北省（直隸）・博野縣の人である。明・崇禎八年（一六三五）の生まれで、清・康熙四十三年（一七〇四）に歿している。著作として、『存學編』四卷、『存性編』二卷、『存治編』一卷、『存人編』三卷、『四書正誤』六卷、『朱子語類評』一卷、『禮

文手鈔』五卷が存するほか、門人所編の『言行錄』二卷、『關異錄』二卷、『習齋記餘』二卷、『年譜』二卷などが残存する。生前は、必ずしもポピュラーな思想家とは言えず、同時代人としては、孫奇逢（夏峯）、陸世儀（桴亭）らとの間で、ごく限られた交友があつたことが知られる程度である。やはり後述する顔李學の再評價により、民國七年（一九一八）、孔廟に從祀された。

小論で些かの考察を加える、その高弟の李塋は、字を剛主、號を恕谷と言ひ、河北省・蠡縣の人である。清・順治十六年（一六五九）の生まれで、雍正十一年（一七三三）に卒している。康熙二十九年（一六九〇）の舉人。その著作に、『周易傳註』七卷、『詩經傳註』八卷、『春秋傳註』四卷、『論語傳註』二卷、『大學傳註』一卷、『中庸傳註』一卷、『論語傳註問』二卷、『大學傳註問』一卷、『中庸傳註問』一卷、『小學稽業』五卷、『大學辯業』四卷、『聖經學規纂』二卷、『論學』二卷、『學禮』五卷、『學射』二卷、『學樂錄』五卷、『平書訂』十三卷、『擬太平策』七卷、『宗廟考辯』一卷、『恕谷後集』十三卷、『天道偶測』一卷、『學御錄』一卷、『恕谷詩集』二卷ほかがある。夙に顔元（習齋）に師事、その歿後、専ら師説を顯彰したほか、同時代人としても、毛奇齡（西河）、胡渭（東樵）、閻若璩（百

詩・潛丘）、萬斯同（季野・石園）、方苞（望溪）らと幅廣く交友している。更に王源、惲鶴生、馮辰、王復禮、程廷祚ら多くの知友や門人に顔元の學を傳えた。やはり師に次いで、民國八年（一九一九）に孔廟に從祀された。

次いで、王源は、字を崑繩、號を或庵と言ひ、河北省（直隸）・大興縣の人である。清・順治五年（一六四八）に生まれ、清・康熙四十九年（一七一〇）の歿。康熙三十二年（一六九三）の舉人である。著に『平書』十卷、『居業堂文集』二十卷があり、前出の『平書訂』十三卷は、彼の著した『平書』が後に散佚し、これを李塋が補訂し直したものとされる。はじめ王守仁（陽明）の學を敬慕し、李塋より年長だが、晩年に至り、顔元・李塋に受業するに至る。その間、魏禧・毛奇齡（西河）・李顥（中孚・二曲）・徐乾學（健庵）・劉獻廷・方苞（望溪）らとも幅廣く交友している。

その他、この系譜に列なる人びととして、惲鶴生、馮辰、王復禮、程廷祚らが、擧げられる。まず、惲鶴生は、字は臯聞、江蘇省・武進縣の人で、生卒年は不詳。顔元に私淑し、後に李塋と交友。著に『詩說』『春秋附說』がある。馮辰は、字は拱北、樞天、河北省・清苑の人。李塋に受業し、師の歿後、『年譜』を編纂している。王復禮は、號を草堂と言ひ、浙

江省・錢塘縣の人で、李塋に受業し、著に『四書集註補』『書解正誤』がある。最後に、程廷祚は、字を啓生、號を綿莊、青溪居士などと稱し、江蘇省・上元縣の人である。康熙三十年（一六九一）の生まれ、乾隆三十二年（二七六七）に卒。やはり李塋に受業した。一方で、戴震（東原）らへと到る、いわゆる「氣の哲學」の系譜に連なる思想家との見方もある。著作として、『尙書通義』三十卷、『易通』六卷、『春秋識小錄』三卷、『青溪文集』二十卷が傳えられる。

なお、取り分け顔元の思想的な劃期性を高く顯揚し、評價しつつ、顔李學派といった呼稱や枠組みを用いることが廣く一般に定着するのは、やはり後述する民國期の徐世昌らによる再評價や顯彰を経てからの如くに思われる。翻つて、それ（3）にやや先立つ清末期などにおいては、いわゆる「漢學」的な立場から記述されたものは勿論のこと、程朱學的な觀點からのもものも含め、學案ものなどにあつては、顔元への評價も、相對的に低いことが窺われ、逆に李塋との系譜上の差異を認めるような傾向が見受けられることにも、注意を喚起しておきたい。（4）

二、「實學」概念の再検討——顔李學派理解の問題點

さて、顔元は、考證學（考據學）全盛の清朝年間を通じて、やや忘れられた存在ではあつたものの、戴望（子高）の『顔氏學記』による顔李學派の表章などを経て、清末以來、徐々に再評價の氣運が高まり、その實踐重視の志向や功利主義的な發想などが殊更に強調され、プラグマティズムなど、總じて近代主義的な立場から、やがては唯物論的な思想史觀まで、いわば時代的な好尚にも左右されるかたちで、些か先入見を伴つた評價が概ね加えられてきた。

まず、戴望は、字を子高と言ひ、浙江省・德清縣の人で、清・道光十七年（一八三七）の生まれ、清・同治二十年（一八七三）に歿。はじめ宋翔鳳に學んだ公羊學者だが、後に顔李學にも傾倒し、熱心にその再評價を試みるも夭逝した。主著の『顔氏學記』十卷（同治八年・一八六九）は、この學派の顯彰とともに、系譜的な整理を行った、最も夙い時期の著作である。他にも、『論語注』などの著述がある。（5）

次いで、より廣汎な再評價の趨勢としては、具體的には、まず民國期における、米國のJ. デューイ（杜威）の影響を受

けた、梁啓超や胡適らによる「實用主義」「實踐實用主義」といった規定をほぼその嚆矢として、「實用」「實利」「躬行」實踐「實行」といった、いわば近代的な「實學」観とでも言うべき含意を伴って理解され、表彰される傾向が著しく、このことは、彼の思想を「一種の唯物論的リアリズム」と評した侯外廬をはじめ、大陸中國を中心とする、マルクス主義的な教條を標準とした戦後の思想史研究においても、基本的には踏襲された。⁽⁶⁾ 因みに、民國期にはまた、章炳麟や周作人といった人びとも、顔元のいわゆる「習行主義」や教育思想などに關心を寄せたほか、恰も五四・新文化運動の翌年の一九二〇年に、中華民國・第四代總統も務めた文人の徐世昌らの提唱による四存學會が創設され、政治的にも學術的にも、さまざまな思惑から、顔李學が再評價され、顕彰される風潮が見られた。⁽⁷⁾ 何れにしても、ほぼ同時期の「科學と人生觀論争」における、むしろ觀念論的な色彩の濃い、張君勱らの「玄學」の立場などに比して、ある種の近代主義的な傾向は紛れもなく、經驗論的合理主義とも言うべき思潮を傳統思想の裡に見出そうとした試みと言えよう。⁽⁸⁾

翻つて、元來、顔元が主張する「實學」とは、次の一節に集約的に述べられる如く、『書經』大禹謨の正徳・利用・厚生

李塹の立場（伊東）

の三事、水・火・木・金・土・穀の六府、『周禮』地官・大司徒の孝・友・睦・姻・任・恤の六行、それに六藝を併せた、むしろ極めて傳統的なものに他ならない。

——「某爲此懼、著存學一編、申明堯、舜、周、孔三事（『書經』大禹謨の正徳・利用・厚生の三事）、六府（『水・火・木・金・土・穀』、六行（『周禮』地官・大司徒の孝・友・睦・姻・任・恤）、六藝（『禮・樂・射・御・書・數』之道、大旨明道不在詩書章句、學不在穎悟誦讀、而期如孔門博文、約禮、身實學之、身實習之、終身不懈者）」（顔元『存學編』卷一、上「太倉陸桴亭先生書」）。

傳統的な儒教的「實學」概念の精確な認識とともに、彼の思想に關する、従前の理解の枠組みそれ自體にも、相應の修正が必要な所以である。この點に關しては、李塹の認識も、師説と全く軌を一にする。その他、「禮樂兵農之學、水火工虞之業」（『恕谷年譜』卷二）といった表現にも見られるように、「禮樂」と竝んで、「兵農」や工商業の重視といったことも、この學派に共通する特徴である。⁽¹⁰⁾

——「古之學一、今之學禁、古之學實、今之學虛。古之學有用、今之學無用。古今不同、何其甚也。古之爲學也、明德、親民、止至善爲道、六徳（『周禮』大司徒の知・仁・

聖・義・忠・和)、六行、六藝爲物。八歲就小學、學小藝、履小節、束髮、就大學、學大藝、履大節、爲學之序。」(『存學編』序)。

もつとも、「實用」「實利」といった評價は、上述のような興味關心に由來する、些か勇み足的なものとしても、顔元の場合には、無論、むしろ傳統的・儒教的なものではあれ、しばしばその思想的な立場が「習行主義」などと呼稱されるように、やはり何と言つても、「躬行」實踐「實行」といった側面を重視していることは、間違いない事實である。次のような論述が、それを端的に示している。

——「秦漢以後、即著述講論之功多、實學實教之效少。」
「實學既亡、二千年乎、唯口頭取勝、紙上爭長。」(顏元「存學編」卷一・明親)、「但凡從讀書中討來識見議論、便如望梅畫餅、靠之饑食渴飲不得。」(同前・三、性理評)。

——「今之言致知者、不過讀書講問思辯已耳、不知致吾知者。皆不在此也。辟如欲知禮、任讀幾百遍禮書、講問幾十次、思辯幾十層、總不算知。直須跪拜周旋、捧玉爵、執巾帛、親下手一番、方知禮是如此、知禮者斯致矣。辟如欲知禮、任讀樂譜幾百遍、講問、思辯幾十層、總不能知。直須搏拊擊吹、口歌身午、親下手一番、方知樂是如此

此、知樂者斯致矣。是謂物格而後知至。故吾斷以爲物即三物之物、格即手格猛獸之格、手格殺之之格。」(顏元「四書正誤」卷一・大學)。

机上の學問・讀書のみでは、如何にも空しく、畫餅のようなのだと考える顔元は、「禮樂」はやはり自らの身體を驅使して、實踐してこそ意味もあり、會得されるべきものであることを、具體的な比喻や描寫を交えて、再三、力説した。更には、「格物」の具體性を強調し、印象づけるために、それを實際に手を下して、禽獸を毆打し、格殺することに準えすらした。しかるに、極端なまでの讀書や學問の「知」的側面の輕視という點に關しては、やはり考證學(考據學)全盛の同時代的な思潮とは、相容れないものであろう。⁽¹⁾

——「周禮人方疑爲僞書、何有三物。但門下不必作周禮三物觀、惟仁義禮智爲德、子臣弟友五倫爲行、禮樂兵農爲藝。請問天下之物尙有出此三者外乎。吾人格物尙有當在此三物外者乎。即雜以後世文章講誦、亦只發明此三者耳。格物之物、非三物而何。吾儒明德親民之學、止於至善、乃尊於農工商、而爲士之職也。」(李塈「恕谷後集」卷四、「與方靈皋書」)。

右の一文にも明らかなように、李塈の場合も、基本的な部

分は、師説を押さえ、それを踏まえるものの、明らかな讀書・學問の輕視は勿論のこと、顔元に見られるような、些か極端な比喩なども、影を潜めている。「格物致知」の解釋においても、師説とは微妙な乖離を見せる。その他、後述するように、二人の思想的なスタンスには、むしろかなりの點で、重大な相違が認められ得る。しかるに、從來、顏李學派といった範疇に概括されたためか、弟子筋の李焯までもが、ほぼ上述のような傾向に連なる人物かの如くに思い做され、表象される傾きすら存していたことは、否定出来ない事實である。⁽¹²⁾

三、『大學』の「格物致知」解釋——「知」重視の立場

實際のところ、顔元と李焯、兩者の思想の間には、一方でかなりの徑庭があり、ある種の樸實さとともに、復古的で原理主義的な志向の強い顔元に對して、李焯の場合、(一)『大學』の「格物致知」解釋における、實踐(＝「行」)に對する認識や「知」の重視に見られる主知主義的な立場、(二)『古文尙書』など、經書に對する懷疑的・辯偽的な傾向を嫌う、經學上のむしろ慎重で現状維持的な態度、(三)封建論と郡縣論との折衷案などに顯著な、より現實主義的な政治論など、總

李焯の立場(伊東)

じて、かえつて概ね穩健な傾向を帯びた主張が、その思想の基調ともなっている。そうした諸點について、少しく具體的に概觀し、些かの考察を加えてみたい。

——「明德、本也、親民、末也。格致、始也、誠意以至天下平、終也。致、推致也、與『中庸』致曲之致同。格、『爾雅』曰、至也、『虞書』、格于上下、是也。程子、朱子于格物格字皆訓至。又『周書』君奭篇、格于皇天、天壽平格、蔡注訓通。又『孔叢子』諫格虎賦、格義同搏、顏習齋謂格物之格如之、謂親身習其事也。又『爾雅』、格格、舉也、郭璞注曰、舉持物。又『爾雅』、到字極字皆同格、蓋到其域而通之、搏之舉之以至于極、皆格義也。物、物有本末之物也、即明德、親民也、即意、身、心、家、國、天下也。然而謂之物者、則以誠、正、脩、齊、治、平皆有其事、而學其事皆有其物、『周禮』禮樂等皆謂之物是也。格物者、謂『大學』中之物如學禮樂樂類、必舉其事、造其極也。朱子曰、謂實走到地頭。如南劍人往建寧、須到郡廣上方是至、若只到建陽境上、即不謂之至也。致知格物者、從來聖賢之道、行先以知、而知在于學。『周官』曰、不學牆面。『學記』曰、人不學、不知道。董仲舒曰、強勉學問、則聞見博而知益明。徐干曰、白日照則所求見。學

者、心之白日也。故先王立學、教以六德、六行、六藝、皆此謂也。語云、一處不到一處黑、最切致知在格物之義。」

(李塈『大學辯業』卷二・致知在格物解)。

——「朱子亦知格物は學文、但認聖學未甚確、故言有離合。如以窮至性天爲格物、則是上達、知天命之事、非成童入學事也。以讀書講論文字爲格物、則後世文墨之學、非古大學之物也。應接事物、存心省身爲格物、則又力行之功、非格物也。以力行爲格物、是行先于知矣、倒矣。或曰、子之言學禮學樂、非力行歟。曰、非也。好學、力行之分、聖人明言之矣。故『中庸』曰、博學之、篤行之。『易』曰、學以聚之、又曰、仁以行之。『中庸』亦載、孔子曰、弗學何以行。可見學與行雖一事、而實兩事也。蓋學于平日爲學、行于臨時爲行。如今贊禮、先事演禮謂之學、至供祭、會賓、相禮乃謂之行。後儒聖學失傳、凡言學字皆不的。不以讀書爲學、則返之而以力行爲學矣、皆與聖經不合。格物致知、學也、知也。誠意、正心、脩身、齊家、治國、平天下、行也。六藝、大學之實事也。今云入大學、更不甚學事、只理會理。何不觀『內則』爲學之序乎。且理與事、亦何可分也。」(李塈『大學辯業』卷三・辯後儒格物解)。

李塈は、「格物」の謂について、顔元の「親身習其事」といった解釋も含め、諸家の見解を並べるものの、大筋で「物に格る」(至る・到る)と解する程朱の説を踏襲し、明らかに「行」に先行する「知」を認め、それが具體的な「學」にもとづくべきことを説く。それは、「窮至性天」、「讀書講論文字」の何れに偏つても不可であるが、かといつて、「讀書」を「學」とは考えずに、たんなる「應接事物、存心省身」のような「力行」を「格物」と見做すことは、「行」を「知」に先行させる顛倒ですらある、という立場を取る。そして、「學」と「行」は本來、一體不可分のものであり、「讀書」と「力行」も無論、兩立すべき事柄ではあるが、「學」や「知」に相當する日常平生の「格物致知」を前提にしてこそ、はじめて時に應じて、「誠意、正心、脩身、齊家、治國、平天下」といった「行」が成立し得るもの、と認識された。

以上のような、李塈の「大學」解釋、特にその「格物致知」理解などに見られる、「行」に對する「知」重視の立場は、顔元のやや極端な實踐至上主義や現場主義とは、大きく袂を分かるところであり、兩者の思想傾向の本質的な分歧点とも言えよう。そうした彼のむしろ主知主義的な傾向についてはまた、既に入船弘道氏による適確な指摘と分析があり、參照に

値する。⁽¹³⁾

四、『古文尙書』をめぐる諸問題——經學上の慎重な態度

次いで、當時、『古文尙書』など、經書に對する文獻批判的な研究が相當程度、進捗する一方で、それと並行して、經書に對する懷疑的・辯偽的な傾向を嫌う、經學上のむしろ慎重で現狀維持的な態度が、李焯をはじめ、かなり廣汎に見られたが、その意味するところについては、筆者も、豫て少しく論じたことがある。⁽¹⁴⁾ まず『古文尙書』の信憑性に關して、閻若璩の『尙書古文疏證』が、重大な疑義を提起したのに對して、その駁論として、毛奇齡の『古文尙書冤詞』（『西河合集』所收）が著された譯であるが、李焯の場合、具體的には、後者に序文を寄せていることが、よく知られている。

——「及焯南游時、客有攻辯中庸、大學、易繫、以及三禮、三傳者。焯見之大怖、以爲苟如是、則經盡亡矣。急求其故、則自攻古文尙書爲偽書始。」（李焯（毛奇齡）『古文尙書冤詞』（『西河合集』）序）。

——「今人辯尙書有偽之說、先生既有駁正、此事所關非小、即可行世。閻百詩書未見、姚立方所著略觀之、錢生

李焯の立場（伊東）

書則詳觀之、均屬謬誤。今人駁尙書不已、因駁繫辭、駁繫辭不已、因駁中庸、不至揚矢周孔不止。此聖道人心之大患、豈能坐視不言。焯亦欲少有辯論、俟錄出請教。」（李恕谷先生年譜）卷三、李焯「上毛河右書」。

——「黃太冲嘗謂、聖人之言不在文詞而在義理。義理無疵、則文詞不害。其爲異如大禹謨人心、道心之言、此豈三代以下可僞爲者哉。」（閻若璩『尙書古文疏證』卷八・第一九に引く、黃宗羲の言説）。

——「家大人徵君先生著尙書古文疏證若干卷、……怪且非之者亦復不少、徵君意不自安、曰、吾爲此書、不過從朱子、引而伸之、觸類而長之耳。」（閻詠『朱子古文書疑』序）に引く、閻若璩の言辭）。

——「然則今之尙書、其今文古文皆有之三十三篇、固雜取伏生、安國之文、而二十五篇之出於梅賾、舜典二十八字之出於姚方興、又合而一之。孟子曰、盡信書則不如無書、於今日而益驗之矣。」（顧炎武『日知錄』卷二・古文尙書）。

——「古今文之辯、多矣。雖朱子亦疑之。……近年學者則毀詬尤甚焉。其語殆不足述。餘曰、果哉後學之疑古也。……其書既行於漢代四百年、則益莫之敢改也。故難者愈難。孔壁之書、自其校出之時、間或增減以通文意有之。

而其書又藏久而後顯。安必傳者之無潤色於其間哉。故易者愈易。然則古文云者、疑其有增減潤色而不盡四代之完文理或有之矣。謂其純爲偽書者末學之膚淺、小人而無忌憚也。」(李光地『榕村集』卷十七・尚書古今文辯)。

すなわち、夙に吉田純氏もいみじくも示唆されるように、彼らのいわば守舊的とも思える非決定や態度保留、逡巡の裡にこそ、經學それ自體の存立基盤すら掘り崩しかねない、過度に懷疑的・辯僞的な傾向を抑制し、ある種のバランスを恢復しようとする、⁽¹⁵⁾すぐれて慎重かつ思慮に富む態度が、看取し得るのである。

なお因みに、閻若璩の『尚書古文疏證』において、まさに問題視された、『尚書』大禹謨の「人心・道心」の一節に關しては、『古文尚書』の文獻批判といった側面のみならず、當時の思想的な文脈における、存在論や人性論上の「理氣」相即や「氣質の性」への二元化といった趨勢のなかで、「心」の構造をいわば本來性や理想態と現實態との二重性として捉える、道學・朱子學的な理解が、次第に疑問に付され、やがて否定視されるようになった⁽¹⁶⁾點とも、一面で、符節を合していることも、附言しておきたい。

——「理即氣之理、斷然不在氣先、不在氣外。知此則知

道心即人心之本心、義理之性即氣質之本性。」(劉宗周(念臺)『劉子全書』卷十二)、「心只有人心、而道心者、人之所以爲心也。性只有氣質之性、而義理之性者、氣質之所以爲性也。」(昔人解人心道心、道心爲主、而人心每聽命焉。如此說、是一身有二心矣。離却人心、別無道心。如知寒思衣、知飢思食、此心之動體也。當衣而衣、當食而食、此心之靜體也。然當衣當食、審于義理、即與思衣思食、一事并到。不是說思衣思食了、又要起箇當衣而衣、當食而食的念頭。」(同前・卷十三)。

——「人心道心、正是荀子性惡宗旨。惟危者、以言乎性之惡。惟微者、此理之散殊、無有形象、必擇之至精而後始與我一。故矯飾之論生焉。後之儒者、於是以心之所有唯此知覺、理則在於天地萬物、窮天地萬物之理、以合於我心之知覺、而後謂之道。皆爲人心道心之說所誤也。夫人只有人心。當惻隱自能惻隱、當羞惡自能羞惡、辭讓是非、莫不皆然。不失此本心、無有移換。便是允執厥中。故孟子言求放心、不言求道心。言失其本心、不言失其道心。夫子之從心所欲、不踰矩、只是不失人心而已。然則此十六字者、其爲理學之蠹甚矣。」(黃宗羲(閻若璩)『尚書古文疏證』序)、『南雷文約』卷四、『南雷文定三集』卷一)。

——「蓋舜以昔所得於堯之訓戒、竝其平日所嘗用力而自得之者、盡以命禹、使知所以執中而不至於永終耳、豈爲言心設哉。近世喜言心學、捨全章本旨而獨論人心、道心、甚者單摭道心二字、而直謂即心是道、蓋陷於禪學而不自知、其去堯、舜、禹授受天下之本旨遠矣。……世之學者

遂指此書十六字（『尚書』大禹謨の人心・道心の一節）爲傳心之要、而禪學者借以爲據依矣。愚按、心不待傳也、流行天地間、貫徹古今而無不同者、理也。理具於吾心、而驗於事物。心者、所以統宗此理而別白其是非、人之賢否、事之得失、天下之治亂、皆於此乎判。此聖人所以致察於危微精一之間、而相傳以執中之道、使無一事之不合於理、而無有過不及之偏者也。」「外仁、外禮、外事以言心、雖執事亦知其不可。執事之意必謂仁與禮與事即心也、用力於仁、用力於心也。復禮、復心也。行事、行心也。……危哉、心乎。判吉凶、別人禽、雖大聖猶必防乎其防、而敢言心學乎。心學者、以心爲學也。以心爲學、是以心爲性也。心能具性、而不能使心即性也。是故求放心則是、求心則非、求於心則是。我所病乎心學者、爲其求心也。」（顧炎武『日知錄』卷十八・心學）

「大禹謨」の「人心・道心」の一節を、『荀子』の性惡説に

李塏の立場（伊東）

すら通ずるものとした、黃宗羲の後年の斷案も、一面では、その師筋に當たる劉宗周（念臺）が説くところの「人心・道心」を二重構造において理解してはならないとの、むしろ心性論上の議論を踏まえた部分もあろう。⁽¹⁷⁾

顧炎武もまた、時にこうした言説が、悪しき意味での「心學」に繋がることを危惧したと見受けられるが、そうした認識それ自體は、むしろ彼のいわゆる「古之所謂理學、經學也。……今之所謂理學、禪學也。」（顧炎武『亭林文集』卷三、「與施愚山書」といった懸念とも通底するもので、彼の立場は黃宗羲とは逆に、傳統的・正統的な經學の意義や存立價値を認め、經學上の現狀維持的な態度に與する、李塏や李光地（榕村）らにも近接した、やや守舊的なニュアンスも含んでいることは、やはり上述の通りである。

五、政治論の位相——封建・郡縣論、井田論と田

制論議

最後に、李塏の政治論について、同時代的な思潮のなかで、それが如何なる位置づけや意味を有していたのか、彼の封建・郡縣に關する議論や井田論などを概観しつつ、瞥見することにした。

清代初期の封建・郡縣論や井田論、田制論議などについては、筆者も曾て些かの考察を加えたところであるが、當時の全體的な布置のなかで、まず最もラディカルで先鋭的な議論としては、井田と封建とを一貫したものと捉え、兩者の實現を強く主張するものがあり、有名な呂留良（晩村）のほか、まさに李塏の師である顔元などが、これに相當する。

——「封建井田之廢、勢也、非理也。亂也、非治也。後世君相、因循苟且以養成其私利之心、故不能復返三代。孔孟程朱之所以憂而必爭者、正爲此耳。雖終古必不能行、儒者不可不存此理以望聖王之復作。今托身儒流而自且以爲迂、更復何望哉。」（呂留良（晩村）『四書講義』卷三十四）。

——「然欲法三代、宜何如哉。井田、封建、學校、皆斟酌復之、則無一民一物之不得其所。是之謂王道。不然者不治。」（顔元『存治編』、王道）。

しかるに、こうした事例は、むしろ復古的・原理的な理念や教條に止まり、全體から見れば、些か極端な論調であることも否めず、その對極には、やはり時勢の趨勢からも、郡縣制の存立の必然性を説く、王夫之（船山）のような立場もあつたこともまた、周知の事實である。

——「兩端爭勝、而徒爲無益之論者、辯封建者是也。郡

縣之制、垂二千年而弗能改矣。合古今上下皆安之。勢之所趨、豈非理而能然哉。」（王夫之（船山）『讀通鑑論』卷一、秦始皇皇）。

まず封建・郡縣の議論に關してのみ、結論的に言うなら、李塏の議論は、やはり有名な顧炎武の「郡縣論」や、在地の士人層の大勢をほぼ代辯するものと思われる、陸世儀（桴亭）などの所説と同様、兩者の長短を折衷せよとの、かえつて穩當で、より現實主義的な見解と見做すことが出来る。

——「平書曰、天子不能獨理也。三代以封建、後世以郡縣。封建之利在藩屏、天子分理其政事、勢可以長久。害在世守、強弒逆戰爭、不可制而生民罹其毒。郡縣之利在守令、權輕易制、無叛亂之憂。害在不能任事、姦究可以橫行、權臣可以專擅、天子孤立於上而莫之救。是二者皆各有其利害、歷代故轍昭然。凡持一偏之得失以爲言者、皆非也。然則王者將何從。曰、兼收二者之利而辟其害、使其害去而利獨存、斯可以爲治矣。」（李塏『平書訂』卷二、分土第二）。

——「井田、不可與封建并論也。封建不宜行、而井田必宜行也。……以民有田無田多田少、參差不齊、不可以供億也。民不溥所養則貧、兵不出於農則弱、貧弱之天下

可久支乎。故井田必宜行。然井田又不可與選舉并論也。選舉易行而難壞、井田難行而易壞也。」(李塿『平書訂』卷七・制田第五上)。

——「有聖人起、寓封建之意於郡縣之中、而天下治矣。」(顧炎武『亭林文集』、「郡縣論」一)。

——「善治天下者、當去兩短、集兩長。循今郡縣之制、復古諸侯之爵、重其事權、寬其防制、久其祿位、有封建之實、無封建之名、有封建之利、無封建之害。」(陸世儀『桴亭』『思辯錄輯要』卷一八・治平類)。

なお、黃宗羲の場合も、封建論にややシフトした言説を展開するが、その際、古代の理想でもあった「兵農」の一致や不可分を説くことが顯著であつて、この點、前述したように、やはり「兵農」を重視した顏李學派の基調とも、符節を合するところである。しかるに、こうした主張に關しては、それが理念的な議論に止まる限り、必ずしも問題視はされなかつたものの、封建論の場合などと同様、それが急進化して、「兵農分離」を原則とする清朝政權の立場に抵觸したような事例⁽¹⁹⁾においては、時に彈壓を蒙る對象ともなつたようである。

——「今封建之事遠矣。因時乘勢、則方鎮可復也。封建之弊、強弱吞併、天子之政教有所不加。郡縣之弊、疆場

李塿の立場(伊東)

之害苦無已時。去兩者之弊、使其並行不悖、則沿邊之方鎮乎。」(黃宗羲(梨洲)『明夷待訪錄』、方鎮篇)。

——「自三代以後、亂天下者無如夷狄矣、遂以爲五德殄眚之運。然以餘觀之、則是廢封建之罪也。秦未有天下、夷狄之爲患於中國也、不過侵盜而已。」「兵民爲二、蓋自漢始也。是故廢封建則兵民不得不分。分兵民則不得不以民養兵、以民養兵則天下不得不困。」「嗚呼、古有天下者、日用其精神於禮樂刑政、故能致治隆平。後之有天下者、其精神日用之疆場、故其爲治出於苟且。然則廢封建之害至於如此、而或者猶以謂諸侯之盛強、使天子徒建空名於上。夫即不幸而失天下於諸侯、是猶以中國之人治中國之地、亦何至率禽獸而食人、爲夷狄所寢覆乎。」(黃宗羲『留書』、封建、『南雷詩文集』下)。

さて、翻つて井田論であるが、李塿の場合、既に見たように、呂留良や師の顔元らの急進的な意見とは異なり、それを必ずしも封建論と一繋がりものとは考えず、兩者を辯別し、封建・郡縣の折衷という中間的な提案を提起する一方で、やはり井田に關しては、その實現をむしろ頑なに主張しているように見受けられる。當時において、復古的・原理的な教條としてはともかく、實質的な意味で井田を標榜することは、

限田・均田といった田制改革を要求するものであった。⁽²⁰⁾ 例えば、呂留良などもまた、この件では、彼としてはやや現実的な提案として、井田が不可能であるとしても、限田・均田を實施することで、その趣旨を體することが可能であると説いている。これとは對蹠的な見解が、やはり有名な黄宗羲の議論などに見出し得る。

——「後世謂井田必不可行、其說大約有二。謂豪強之田不可復取、與夫司農歲入、不足以供所出耳。然田制之法、又有均田限田之法以通之。」(呂留良『四書講義』卷十五)。

——「以聽富民之所占、則天下之田自無不足。又何必限田、均田之紛紛、而徒爲困苦富民之事乎。」(黄宗羲『明夷待訪錄』、田制篇)。

李塏はまた、「非均田則貧富不均、不能人人有恆産。均田第一仁政也。」(『擬太平策』)などとも述べるが、事實上、限田・均田などが不要不急の所爲であるとして、その實行を否定視する、黄宗羲や王夫之らの議論とは、かなりの徑庭がある。後者は、富農や富民層の利益を擁護し、それを代辯する中産階層的な立場に依據するものと思われ、主要な政治論のなかでも、この點に關してのみは、李塏はむしろ概して師の顔元にも近い、より平等主義的な志向を共有しているものと認め

られる。彼らの同時代的な經世論においては、經濟的な強者や富裕層が土地を兼併していく事態についての認識では一致しながらも、そうした大土地所有の弊害をどう考えるか、また抑制のための關與や介入をめぐることは、大きな意見の懸隔が存していた。⁽²¹⁾

六、結語に代えて

李塏の思想的な立場には、總じて、師説に對する一定の修正といった意味合いが濃厚であり、彼の場合、生前、學界や人的交流においても、やや孤立的であつた師の顔元とは異なり、同時代の思想家や學者たちとの交流も存外、幅廣かつたことが知られている。このことは、一面で彼の思想が、ある意味で、同時代のごく一般的な多數派の士人たちにも共通するニュアンスに富み、その時點における、ある種の穩當な常識や良識を反映した、現實感覺にも裏打ちされていたことを、傍證的、狀況證據的に示しているとも考えられる。

そうした李塏の立場から、師の顔元の思想を逆照射するなら、考證學(考據學)の全盛期に、彼が些か忘却されていた所も、自ら明らかとなろう。もつとも、小論でも縷述した通り、近代的な意味での「實學」觀とは異なるとは言え、實踐

を重視するその「習行主義」は、宋學以來の内面的な修養法とは一線を劃し、夙に三浦秀一氏なども指摘されるように、むしろ陽明學の一定の刻印が明らかであると同時に、古禮の遵守といった、あくまでも具體的な事物や事象に即しての實踐を重視する「事物之教」には、その復古主義的な傾向とともに、かえつて考證學(考據學)とも、一脈通ずる志向を見出すことが出来る。逆に、いわば極端な現場主義とも言える態度や讀書の輕視などは、考證學(考據學)の文獻實證主義や主知主義的で分析的な思考法とは相容れず、地縁や人脈によるネットワークの多寡といった外在的な要件を別とすれば、これこそが、彼が同時代において無視された最大の要因でもあつたらう。

翻つて、李塋の立場は、大筋では顔元の「習行主義」なども、一定程度、繼承しつつも、取り分けその『大學』の「格物致知」解釋などにも明らかなように、主知主義的な傾斜を深め、師の顔元にも強く痕跡を留める陽明學的な思考法との訣別と同時に、例えば馮友蘭などが否定的に解釋するのとは對蹠的に、むしろ積極的な意味でも、道學・朱子學的な立場への一種の搖り戻し的な回歸を圖ろうとする傾向が、明白に看取される。⁽²³⁾

李塋の立場(伊東)

その人脈やネットワーク、交友關係も、毛奇齡、閻若璩、萬斯同ら、江南地方を中心として、清朝考證學を代表する人士にも及んでおり、やや時代的に先驅ける顧炎武らも含め、經書解釋などにおいて、彼らの思考の圏域とも共通した感覺や方法論が、隨處に容易に見出し得る。この點、ある種の樸實さを基調としつつ、孫奇逢(夏峰)や李顥(二曲)といった、朱王折衷から陽明學的な方向性を多分に有する、いわゆる「北學」や「關學」と呼稱される人びとと親交を結び、思想的にも類縁性が多く見られる顔元とは、やはり些かの徑庭がある。また、やはり既に概述したように、經書や經學に關して、懷疑的・辯偽的な傾向を忌避する、慎重で現状維持的な態度は、李塋のほかにも、顧炎武や李光地(榕村)ら、むしろ朱子學的な立場に親近性を有する思想家において、廣汎かつ顯著な現象であることは、一面で見易い道理であらう。しかるに、夙に佐々木愛や金原泰介などの諸氏も、正當にも注意を喚起されている如く、李塋のこうした姿勢に大きな影響を與えた毛奇齡の場合、生來、論争的な人物であつたことを差し引いても、一方で陽明學に左袒して、朱子學批判や『家禮』批判を行うなど、その點ではむしろ顔元にも近く、朱子學・陽明學の雙方に對する評價や批判の基軸は、その實、一筋縄では

いかない部分もある。⁽²⁴⁾

他方、李塹の場合、多くの考證學（考據學）者とは異なり、明確な經世志向を有すると同時に、この點においても、大枠では師説とは袂を分かち、概ね穩健で現實主義的な政治論を身上としている。その反面で、井田論や田制論に關しては、顏元とも一脈通じる、平等主義的な志向性を保持するなど、むしろ小農層を擁護する立場に與するが、その點、江南の富裕層を代辯する黃宗羲や王夫之らの議論とは對蹠的で、地域的な特性や偏差なども、背景に介在しているものと思われる。小論では、李塹を中心に、師の顏元も含め、兩者をめぐる從來の評價の再檢討を些か促すと同時に、黃宗羲や顧炎武、王夫之の三大儒、孫奇逢（夏峯）・陸世儀（桴亭）・李顥（二曲）ら清初の朱子學や、更には、毛奇齡・閻若璩らの清朝考證學（考據學）などの類似や交差、接點などを再考し、それらを繋ぐ補助線を索定することを試みたが、當時の思想的な布置は、一面でかくも錯綜しており、それらをより整合的に理解し得るためには、個別・具體的な事例の一層の精査が必要であらう。

注

(1) 山井湧（一九五四）（二九八〇）では、顏元について、廣い枠組みとしては、いわゆる「經世致用の學」に系譜づけた上で、孫奇逢（夏峯）・陸世儀（桴亭）・李顥（二曲）らの朱王折衷の思想家とも併せて、「實踐派」と呼稱し、「經學史學派」「技術派」との鼎立として説明している。その思想的な特徴に鑑みれば、むしろ相應の説得力のある見解と言えよう。

その他、比較的近年では、陳祖武（一九九二）（二〇〇二）もまた、前著の第九章「从孫奇逢到顏李學派」、次いで、後者の第六章「从關中、漳南二書院看清初的關學與北學」において、それぞれ孫奇逢や李顥（二曲）と顏元らとの思想的な親近性を示唆しており、興味深い。その實踐志向に加え、彼らの樸實さを基調とするような學風はまた、江南などとは異なつた、華北地方の内陸部のある種の地域性の産物としても、再檢討の餘地があるう。

(2) 山井湧（一九七九）は、そうした觀點から、彼の思想を位置付け、評價している。

(3) すなわち、徐世昌『清儒學案』卷十一・習齋學案に、顏元・王源・鍾鏐・惲鶴生・程廷祚ほか、卷十三・恕谷學案に、李塹・馮辰・王復禮ほかの人びとをそれぞれ擧げるほか、同じく、徐世昌『大清畿輔先哲傳』卷十六・師儒傳七では、顏元・李塹・王源を、卷十七・師儒傳八に、顏李師友を列記するが如くである。次いで、『清史稿』卷四百八十・列傳二百六十七・儒林一においても、顏元・王源・程廷祚・惲鶴生・李塹を列擧

し、『清史列傳』卷六十六・儒林傳一も、顔元・王源に續いて、李塏・惲鶴生・程廷祚の名を記して、その履歷を紹介している。

- (4) 例えば、明確に「宋學」的な立場を標榜する、方東樹の『漢學商兌』にあっても、「至於顔元、李塏、李容等、知尊性崇禮矣。亦不能道中庸、盡精微、即仍是問學之失、此方辯漢學、未暇及彼也。」(卷上)と述べて、些か冷淡な扱いとなっている。逆にむしろ「漢學」的な觀點に依據するものとしては、唐鑑の『清(國朝)學案小識』においても、卷十二・經學學案に、李恕谷先生傳を載せるのみである。その他、李元度の『國朝先生事略』卷三十・名儒では、標題として、李剛主先生事略を立て、李塏・顔元・王源ほかの序列で紹介している。また、支偉成『清代樸學大師列傳』においては、まず、清代樸學先導大師列傳第一に、顔元を掲げつつ、併せて王源を附記し、北派經學家列傳第二の中で、李塏・程廷祚について略述している。
- (5) なお、狩野直喜(一九五三)なども、彼を基本的には、公羊學の範疇に數えながら、むしろやや埋もれていた異色の思想家とも言うべき、顔元らへの再評價を清末という時代相との関連で捉えている。同書・六四一〜六四三頁、參照。因みに、顔元には、明清の鼎革の際に、清兵に拉致されて行方不明となった亡父の行迹を辿り、その歿地と埋葬された場所を探し當てて、柩を擔いで郷里に持ち歸つたとの逸話がある。
- また、後世、戴望自身も、顔李學派の中興に與つた人物と

李塏の立場(伊東)

して、その學統に含める見方も生まれた。張舜微(一九九一)、『顔李學記・第三』など、參照。同書はまた、清代を通じての顔李學派の盛衰を述べつけている。更に、近年の成果である王陽春(二〇〇九)もまた、顔李學派の形成と傳播、展開の様相を詳述する。

- (6) その代表的なものとして、プラグマティズム的な立場からの理解にもとづく評價として、夙い時期のものに、胡適(一九二五)、梁啟超(一九二二)(一九二六)などがあり、他方、唯物史觀に依據して、評價を加えたものに、侯外廬(一九五六)を筆頭とする、戦後の大陸中國での一連の研究が挙げられる。楊培之(一九五六)、姜廣輝(一九八七)、陳東原(一九八九・一九九六)なども、それぞれ貴重な成果ではあるが、そうした傾向は否めなかつた。因みに、日本においても、村瀬裕也(一九六八・七一・七三)、小野和子(一九七〇)など、曾ては、そうした視角を踏襲する事例も多かつた。

翻つて、詳細については、紙幅の関係で、割愛せざるを得ないが、近年では、中國でも、陳山榜(二〇〇四)、朱義祿(二〇〇六)、王陽春(二〇〇九)など、むしろ同時代的な夥しい史料を涉獵した、歴史的・實證的な研究が主流化しつつある。

(7) 四存學會の創設には、當時の政治的・社會的な背景のなかで、さまざまな思惑や外在的要因もあつたやに窺われるが、學術的な文脈でも、斯界に對して、相應のインパクトや興味、關心を及ぼしたようで、日本でも、小島祐馬(一九二〇)が、

ほぼリアルタイムで紹介を試みている。

(8) 源了圓(一九八〇)、第一章「實學概念の検討」にも、ほぼ同様の指摘が見られる。同書・七十六・七十七頁、参照。因みに、「科學と人生觀論争」において、胡適らに對抗して、觀念論的な立場の「玄學」に與した張君勳らにあつては、歐米の思潮のなかでは、取り分けドイツ觀念論やベルグソンの生命の哲學などへの傾倒や親炙が顯著であり、その對比は歴然としていよう。

(9) その意味では、むしろ小柳司氣太(一九三四)、清水潔(一九三六)、諸橋轍次(一九四五)など、戦前の日本における諸研究の方が、傳統的な儒教的實學觀を踏まえた、穩當な理解を示している。

因みに、儒教の學問を指して、「實學」とする呼稱は、岡田武彦(一九七七・一九八四)、第五章「宋明の實學」、島田虔次(一九七八)などによれば、元來、程頤(伊川)をその嚆矢とするたとされる。「治經、實學也。」「如中庸一卷書、自至理便推之於事、如國家有九經及歷代聖人之迹、莫非實學也。」(程頤(伊川)「河南程氏遺書」卷一、「二先生語」などの規定が、それに當たろうが、これを承けて、朱熹(朱子)にも、「其味無窮、皆實學也。」(朱熹「中庸章句」といった表現が見える。また、楠本正繼(一九五八)、岡田武彦(一九八三)、源了圓(一九八六)、大谷敏夫(一九八七)、伊東貴之(一九九五①)なども、それぞれ参照されたい。

しかるに、類似の考え方としては、胡瑗(安定)などにも、「體」「文」との對比においてであるが、「聖人之道、有體、有用、有文。君臣父子、仁義禮樂、歷世不可變者、其體也。詩書史傳子集、垂法後世者、其文也。舉而措之天下、能潤斯民、歸于皇極者、其用也。」(黃宗義・全祖望撰修「宋元學案」卷一、安定學案、所引「胡瑗弟子劉彝語」といった表現が見える。

その他、顔元らにやや先驅ける、清朝初期における言説として、「有通儒之學、有俗儒之學。學者、將以明體適用也。……自宋迄元、人尚實學。……明代人材輩出、而學問遠不如古。」(顧炎武「日知錄」、潘耒「原序」といった文例が擧げられる。逆に清朝に到って、明末以來の弊風が一掃され、むしろ「實學」が改めて興起した、といった認識も、ある時期から相當程度、廣く共有されたようであり、以下の事例などが、それぞれ、そうした事態を象徴的に現しているよう。

——「有明三百年、以時文相尚、其弊庸陋調儻、至有不能舉經史名目者。國朝經學盛興、檢討首出于東林、戢山空文講學之餘、以經學自任、大聲疾呼、而一時之實學頓起。」(阮元「學經室二集」卷七、「毛西河檢討全集後序」)、「承晚明經學極衰之後、推崇實學、以矯空疎、宜乎漢學重興、唐、宋莫逮。……王、顧、黃三大儒、皆嘗潛心朱學、而加以擴充、開國初漢、宋兼采之派。」(皮錫瑞「經學歷史」十、經學復盛時代)。

——「清代思想果何者邪。簡單言之、則對於宋明理學之一大反動、而以復古爲其職志也。其動機及其內容、皆與歐州之

文藝復興絶相類。」(梁啓超『清代學術概論』二)、「要之清學以提倡一實字而盛、以不能貫徹一實字而衰、自業自得、固其所矣。」(同前・二十)。

(10) いわゆる「義利の辯」などの文脈でも、むしろ實利や功利の正當性を主張した思想家といった観点から、顔元、李塏、程廷祚らから戴震への影響や繼承關係について、既に溝口雄三(一九八〇)、大谷敏夫(一九八七)(一九九一)などが、それぞれ検討を加えている。取り分け大谷敏夫は、清朝を通じて、考證學などの裡にも、實利的な思想が伏流水の如く脈々と受け継がれ、清末の經世思想へと展開していくものとして、その道筋を描出している。その他、詳細は、伊東貴之(二〇〇七)を参照されたい。また、「兵農」の重視に關しても、後述する黄宗羲(『明夷待訪録』『留書』ほか)などとも共通する論點として、むしろ當時の現實の具體的な時代狀況との關連においても、より實質的な検討を加える必要があると思われるが、なお他日を期したい。

(11) やはり、源了圓(一九八〇)、第一章「實學概念の検討」に、同様の見解が披瀝されている。同書・七十六・七十七頁、參照。

(12) こうした傾向に對して、馮友蘭は、『中國哲學史新編』第六冊)のなかで、次のように述べて、兩者の懸隔を意識化させており、そうした把握自体は、多々肯綮に中る部分もあるが、その評價の基軸は、小論とは全く對蹠的なもので、やはり顔

李塏の立場(伊東)

元のある種の先進性を強調しつつ、他方で、李塏が恰もそこから舊套に退歩したかの如く、過小評價するものである。もつとも、李塏の「格物致知」解釋の師說との差異を強調し、むしろ道學の圈内に立ち戻るものとの理解は、この文脈における馮友蘭の價值判斷を別とすれば、ある意味では、正鵠を得た認識とも言えよう。彼の價值基準は、言うまでもなく、マルクス主義的な教條を標準とし、それにもとづくものであるが、公式的には、唯物論に轉向後の發言とは言え、何處までが、彼自身のいわば本音を吐露したものを問うてみても、最早、詮ないことではあろう。

——「顔元の講學活動範圍不大、限于河北、河南之間。他的學生李塏的活動能力比較大、爲他作了許多宣傳工作。在當時封建社會中、顔、李并稱、他們的學派稱爲『顔李學派』。其實李塏并不完全了解顔元的思想。李塏在他所寫的《大學辯業》中批評了前人對於格物的解釋、并強調了自己對於格物的解釋、可是完全沒有提到顔元的新解釋。大概顔元从道學打出來的時候、並沒有把他的學生們都帶出來、大部分的學生們然留在道學里邊、他們把顔元不違背道學觀點的文章編爲《四存編》、以爲顔元的主要著作、而把顔元具有新觀點的文章編爲《習齋記餘》。記餘。兩箇字表示他們的輕重倒置、完全不知道顔元的貢獻所在。……所以本書不用『顔李學派』這箇名稱、不講李塏、而只講顔元。」(馮友蘭(一九八九)、第六十一章「顔元對于道學的批判」、附記、三十三頁)。

(13) この點、併せて、入船弘道(一九九六)を、是非とも参照されたい。更に入船氏は、李塋が「明德」と「親民」、「格物致知」と「誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下」の兩者を「本末・先後」の關係で捉えている(『大學辯業』卷二)ことを端的に指摘しているが、そうした見解もまた、李塋のいわば「知行後(知行在先)」の立場にもとづくものと考えられる。李塋はまた、より明確に「故博文之後又須約禮、學問思辯之後又須篤行也。」とも述べている(『大學辯業』卷三)。

(14) 伊東貴之(一九九五②)、(二〇〇五)、第四章「秩序」化の位相」、一〇四―一〇八頁、参照。

(15) この點、吉田純(一九八八)(二〇〇七)、林慶彰(一九九〇)(二〇〇一)などが、きわめて示唆に富む有意義な考察を展開しており、是非とも参照されたい。

(16) 閻若璩の『尚書古文疏證』とそれへの駁論である毛奇齡の『古文尚書冤詞』(『西河合集』)に端を發した、『尚書』大禹謨の「人心・道心」をめぐる當時の解釋や論争については、前掲、注(15)に擧げる論著のほか、ベンジャミン・A・エルマン(一九八三)にも、その経緯が詳述されており、それぞれ参照に値する。

なお、同様に、「氣質の性」への一元化といった、存在論・人性論上の趨勢の大きな變容を背景とし、それと考證學的な文獻批判の成果とが相俟って、經書解釋に大幅な變更を齎した顯著な事例として、溝口雄三(一九八〇)が、『論語』の「克

己復禮」解をめぐる清代初頭から中葉期の議論を辿りつつ、精査するなかで、まさに顔元や李塋、程廷祚、戴震らの劃期性を炙り出している。同・下論・第三章「清代前葉における新しい理觀の確立——克己復禮解の展開からみて」(第一節「宋學的人性論の破綻——顔元・李塋の克己解」、更には、同じく、溝口雄三(一九八二)を、それぞれ参照されたい。

(17) 劉宗周(念臺)に關しては、馬淵昌也(二〇〇一)など、参照。

(18) 伊東貴之(二〇〇五)、第五章「近代儒教の政治論」、参照。なお、これに關連して、近年の注目すべき論著や論考として、馮天瑜(二〇〇六)、趙園(二〇〇六)、張翔・園田英弘共編(二〇〇六)、林文孝(二〇〇六)などがあり、それぞれ有益な示唆に富み、是非とも参照に値するものである。

(19) なお、榎木野宣(一九七五)(附編「清代綠旗兵制の研究」、第六章「綠旗兵制の背景」、大谷敏夫(一九七五)によれば、雍正帝による陸生柁の斷罪事件の場合、彼の封建論が、同時に兵農不分の立場から、清朝政權の兵農分離の原則による召募制を批判していたことが、その背景にあるとして、それが彈壓を蒙る一因となったことを示唆している。

(20) なお、當時の「井田」論議や田制論議に關しては、戸川芳郎・蜂屋邦夫・溝口雄三(一九八七)、第十一章「清代の經世論——封建論と田制論」、本間次彦(一九九五)などを、それぞれ参照されたい。

(21) こうした論點についてはまた、岸本美緒(一九八六)、林文孝(二〇〇四)などを参照されたい。林文孝(二〇〇四)によれば、王夫之の場合、土地の兼併や大土地所有の抑制のための間接的な關與も一應、検討されてはいるものの、基本的には、時勢の推移の必然を重視する立場とも相俟つて、むしろ社會の自律的な展開それ自體の裡に、問題の自然な解決が委ねられ、限田策などによる土地の再配分といった、より積極的な政治的介入や人爲的操作に對しては、總じて否定的な意見が表明されている。

(22) 三浦秀一(一九八五①)(一九八五②)は、顔元の所説と陽明學との契合、兩者の繼承や影響關係について、彼の思想形成を踏まえた、明確な分析と考察を加えており、示唆に富む。また、顔元、並びに顏李學派の復古主義的な方向での原理主義や、それに起因する「實學」觀と考證學(考據學)との一定の親和性について、Kai-wing Chau(周啓榮)(一九九四)も示唆しているほか、伊東貴之(一九九五①)(一九九五②)、並びに、同(二〇〇五)、第四章「秩序」化の位相」において、少しく卑見を述べたところである。

(23) 馮友蘭の見解については、前掲・注(12)を参照のこと。

(24) 佐々木愛(一九九七)(一九九八)、金原泰介(二〇〇三)、また、林慶彰(二〇〇一)などを、それぞれ参照されたい。その他、顔元の「禮」説については、鄭臺燮(一九八七)も参考になる。なお、必ずしも狭い意味での道學・朱子學批判の文

李塋の立場(伊東)

脈ではないが、毛奇齡には、「聖學不明久矣。聖以道爲學、而學進於道、然不名道學。凡道學兩字、六經皆分見之。即或並見、亦只稱學道、而不稱道學。」(毛奇齡「西河集」卷十一・辯聖學非道學文)などと述べて、古來、「道學」という呼稱は存在しなかったとの見解が見える。

※關連人物生卒一覽。

劉宗周(念臺)(浙江)一五七八〜一六四五／孫奇逢(夏峰)(河北)一五八四〜一六七五／陳確(乾初)(浙江)一六〇四〜一六七七／黃宗羲(太沖・梨洲)(浙江)一六一〇〜一六九五／陸世儀(桴亭)(江蘇)一六一一〜一六七二／張履祥(考夫・楊園)(浙江)一六一一〜一六七四／顧炎武(寧人・亭林)(江蘇)一六一三〜一六八二／王夫之(而農・船山)(湖南)一六一九〜一六九二／張烈(武承)(直隸)一六二二〜一六八五／毛奇齡(西河)(浙江)一六三三〜一七一六／湯斌(孔伯・潛庵)(河南)一六二七〜一六八七／李顥(中孚・二曲)(陝西)一六二七〜一七〇五／呂留良(晚村)(浙江)一六二九〜一六八三／陸隴其(稼書)(浙江)一六三〇〜一六九二／唐甄(圃亭)(四川)一六三〇〜一七〇四／胡渭(東樵)(浙江)一六三三〜一七一四／徐乾學(健庵)(江蘇)一六三一〜一六九四／顏元(渾然・習齋)(河北)一六三五〜一七〇四／閻若璩(百詩・潛丘)(山西)一六三六〜一七〇四／萬斯同(季野・石園)(浙江)一六三八〜一七〇

二／李光地（榕村）〔福建〕一六四二～一七二八／王源（崑繩・或庵）〔直隸〕一六四八～一七二〇／張伯行（敬庵）〔河南〕一六五一～一七二五／李塛（剛主・恕谷）〔河北〕一六五九～一七三三／方苞（望溪）〔安徽〕一六六八～一七四九／李紱（穆堂）〔江西〕一六七三～一七五〇／程廷祚（啓生）〔江蘇〕一六九一～一七七七／全祖望（謝山）〔浙江〕一七〇五～一七五五／戴震（東原）〔安徽〕一七二三～一七七七／江藩（子屏・鄭堂）〔江蘇〕一七六一～一八三一／阮元（藝臺）〔江蘇〕一七六四～一八九四／方東樹（植之）〔安徽〕一七七二～一八五一／唐鑑（鑑海）〔湖南〕一七七八～一八六一／宋翔鳳（虞庭・于庭）〔江蘇〕一七七九～一八六〇／戴望（子高）〔浙江〕一八三七（？）～一八七三／皮錫瑞（鹿門・麓雲）〔湖南〕一八五〇～一九〇八／徐世昌（卜五・菊人）〔直隸〕一八五五～一九三九／章炳麟（太炎）〔浙江〕一八六八～一九三六／梁啓超（飲冰室主人）〔廣東〕一八七三～一九二九／胡適（適之）〔安徽〕一八九一～一九六一

※史料・參考文獻。

①一次史料・文獻。

顏習齋・李恕谷『顏李遺書』（『畿輔叢書』所收・光緒五年刊本）
 百部叢書集成、臺灣・藝文印書館。
 顏習齋・李恕谷『顏李叢書』（四存學會排印・民國十二年刊本）臺灣・廣文書局。

顏元『存學編 存性編』『習齋記餘』（一・二）（畿輔叢書本）（王雲五主編・叢書集成初編、中華書局）。

顏元（王星賢等點校）『顏元集』（上・下）（理學叢書・中華書局）。

顏元『四存編』（王星賢標點・四部刊要）（北京古籍出版社）臺灣・世界書局）。

顏元（陳居淵導讀）『習齋四存編』（天地人叢書・上海古籍出版社）。

鍾鏡『習齋先生言行錄』（畿輔叢書本）（王雲五主編・叢書集成初編、中華書局）。

鍾鏡『習齋先生闢異錄』（畿輔叢書本）（王雲五主編・叢書集成初編、中華書局）。

李塛・馮辰校『恕谷後集』（一・二・三）（畿輔叢書本）（王雲五主編・叢書集成初編、中華書局）。

王源『居業堂文集』（一・二・三・四・五）（畿輔叢書本）（王雲五主編・叢書集成初編、中華書局）。

李塛撰・王源訂『明末顏習齋先生（元）年譜』（畿輔叢書本）（王雲五主編・叢書集成初編、中華書局）；新編中國名人年譜集成、臺灣・商務印書館）。

李塛撰・王源訂（陳祖武點校）『顏元年譜』（年譜叢刊・中華書局）。

馮辰撰『清李恕谷先生（塛）年譜』（新編中國名人年譜集成、臺灣・商務印書館）。

馮辰撰『李塛年譜』（年譜叢刊・中華書局）。

陳山榜・鄧子平主編『顏李學派文庫』（全十卷）（河北教育出版社）。

江藩『漢學師承記箋釋』(上·下)(清代學術名著叢刊·上海古籍出版社)。

江藩『國朝漢學師承記(外二種)』(+江藩『國朝宋學淵源記』、方

東樹『漢學商兌』(錢鍾書主編·朱維靜執行主編·徐洪興編校、

中國近代學術名著叢書·香港·三聯書店)。

唐鑑『清(國朝)學案小識』(國學基本叢書·商務印書館)。

戴望(劉公純標點)『顏氏學記』(中國思想史史料叢刊·中華書局)。

皮錫瑞(周豫同注釋)『經學歷史』(中華書局)。

章太炎·劉師培等撰(羅志田導讀·徐亮工編校)『中國近三百年學

術史論』(上海古籍出版社、同·所收「顏學」)『廬書』重訂本·

卷十一、「正顏」(『檢論』卷四)。

李元度纂(易孟醇校點)『國朝先生事略』(一·二)(岳麓書社)。

支偉成纂述『清代樸學大師列傳』(臺灣·藝文印書館·岳麓書社)。

徐世昌等編纂(沈芝盈·梁運華點校)『清儒學案』第一冊(中華書

局·臺北·世界書局·知識產權出版社)。

徐世昌撰『大清畿輔先哲傳』(上·下)(北京古籍出版社)。

徐世昌纂『顏李師承記』(清代傳記叢刊·臺灣·文海出版社·臺灣·

明文書局)。

趙爾巽等撰『清史稿』傳·第四十三冊(中華書局)。

王鍾翰點校『清史列傳』第十七冊(中華書局)。

② 參考文獻·學術論文。

李焯の立場(伊東)

胡適『中國哲學史大綱』(上海·商務印書館·一九一九·東方出版社·一九九六·二〇〇四)。

同(姜義華主編·章清·吳根樑編)『胡適學術文集 中國哲學史』(上·下)(中華書局·一九九一)。

梁啟超『清代學術概論』(商務印書館·一九二二·東方出版社·一九九六)。

同『中國近三百年學術史』(上海·民志書店·一九二六·中華書局·一九三六·臺灣·華正書局·一九九四·東方出版社·一九九六)。

同『中國近三百年學術史——清代學術概論合刊』(臺灣·里仁書局·一九九五)。

胡適『戴東原的哲學』(上海·商務印書館·一九二五)。

張君勱『科學與人生觀』(全二冊·上海亞東圖書館·一九二三·遼寧教育出版社·一九九八·黃山書社·西化·現代化叢書·二〇〇八)。

存萃學社編(梁啟超·胡適·容肇祖·張西堂·邱椿ほか)『顏李學派研究叢編』(清代學術思想論叢·二、香港·大東圖書公司·一九七八)。

錢穆『中國近三百年學術史』(上·下)(商務印書館·一九三七·臺灣商務印書館·一九八〇·中華書局·一九八四)。

金絮如編『顏元與李焯』(王雲五主編·百科小叢書·商務印書館·一九三五)。

張西堂『顏習齋學譜』(一九三七撰述·臺灣·明文書局·一九九四)。

小島祐馬「四存學會の顏李學提唱」(『支那學』第二卷・第一號、一九二〇)。

森本竹城「清朝儒學史概説」(文書堂、一九三〇)、第七章「顏李學派」。

小柳司氣太「顏元の學」(『東洋思想の研究』、關書院、一九三四、所收)。

清水潔「顏習齋の習行主義―主として宋明學排擊と復古主義とに關連して」(『漢學會雜誌』第四卷・第三號、一九三六)。

諸橋轍次「顏・李の實學」(『經史論考』、清水書店、一九四五)のうち「諸橋轍次著作集」第三卷、大修館書店、一九八七、所收)。

劉錫五「顏習齋學傳」(中國文化叢書、臺灣・中央文物供應社、一九五四)。

楊培之「顏習齋與李恕谷」(湖北人民出版社、一九五六)。

郭霽春・存萃社編「顏習齋(元)學譜」(中國近三百年學術史參考資料)(上海・商務印書館、一九五七・香港・崇文書店、一九七一)。

姜廣輝「顏李學派」(中國社會科學出版社、一九八七)。

陳東原「顏習齋哲學思想述」(中國學術叢書・中國大百科全書出版社、一九八九・東方出版中心、一九九六)。

張舜微「清儒學記」(齊魯書社、一九九二)、「顏李學記・第三」。

陳山榜「顏元評傳」(人民教育出版社、二〇〇四)。

朱義祿「顏元・李塉評傳」(中國思想家評傳叢書・南京大學出版社、二〇〇六)。

王陽春「顏李學派的形成與傳播研究」(文史哲博士文叢・齊魯書社、二〇〇九)。

村瀬裕也「顏元の教育説」(上・中・下)(『思想の研究』第三號、『香川大學教育學部研究報告』第三〇・第三四號、一九六八・七一・七三)。

小野和子「顏元の學問論」(『東方學報』第四一冊、京都大學人文科學研究所、一九七〇)。

同「儒教イデオロギーにおける正統と異端」(『岩波講座・世界歴史12』、岩波書店、一九七二)。

三浦秀一「顏元の思想―『存性』『存學』兩篇を中心に」(『集刊東洋學』第五四號、一九八五①)。

同「若き日の顏元―清初士大夫の思想形成に關する一考察―」(『日本中國學會報』第三七集、一九八五②)。

鄭 臺燮「顏元の禮論」(『東洋史研究』第四五卷・第四號、一九八七)。

入船弘道「李塉の『格物致知』解釋について」(『中國哲學』第二五號、北海道大學中國哲學會、一九九六)。

林 慶彰「毛奇齡、李塉與清初的經書辯偽活動」(國立中山大學清代學術研究中心編『清代學術論叢』第一輯、臺灣・文津出版社、二〇〇一)。

侯外廬『中國思想通史·第五卷 中國早期啓蒙思想史』（人民出版社，一九五六）。

餘英時『論戴震與章學誠——清代中期學術思想史研究』（龍門書店，一九七六；東大圖書公司，一九九六）。

古國順『清代尙書學』（文史哲學集成、臺灣·文史哲出版社，一九八一）。

謝國楨『明末清初的學風』（北京·人民出版社，一九八二；上海書店出版社，二〇〇四）。

陸寶千『清代思想史』（臺灣·廣文書局，一九八三；華東師範大學出版社，二〇〇九）。

侯外廬·邱漢生·張豈之主編『宋明理學史』（上·下（一·二））（人民出版社，一九八四·一九八七）。

楊向奎『清儒學案新編』（一）（齊魯書社，一九八五）。

馮友蘭『中國哲學史新編·第六冊』（人民出版社，一九八九）。

同『中國哲學史』下冊（華東師範大學出版社，二〇〇〇）。

陳鼓應·辛冠潔·葛榮晉主編『明清實學思潮史』（上·中·下）（齊魯書社，一九八九）。

同『明清實學簡史』（中國社會科學出版社，一九九四）。

白莉民『西學東漸與明清之際教育思潮』（教育科學出版社，一九八九）。

林慶彰『清初群經辯偽學』（文史哲大系·23，臺灣·文津出版社，一九九〇）。

何冠彪『明末清初學術思想研究』（中國哲學叢刊、臺灣·學生書局，李璫的立場（伊東）

一九九一）。

陳祖武『清初學術思辯錄』（中國社會科學出版社，一九九二）。

王茂·蔣國保·餘秉頤·陶清『清代哲學』（安徽人民出版社，一九九二）。

葛榮晉主編『中日實學史研究』（中國社會科學出版社，一九九二）。

同『中國實學文化導論』（中共中央黨校出版社，二〇〇三）。

詹海雲『清初學術論文集』（臺灣·文津出版社，一九九二）所收「清初陽明學」。

李紀祥『明末清初儒學之發展』（文史哲大系·56，臺灣·文津出版社，一九九二）第五章·第二節「顏元——復古主義者」。

周谷城主編『中國學術名著提要 哲學卷』（潘富恩主編·復旦大學出版社，一九九二）。

周谷城主編『中國學術名著提要 經濟卷』（葉世昌主編·復旦大學出版社，一九九四）。

龔鵬程『晚明思潮』（臺北·里仁書局，一九九四；北京·商務印書館，二〇〇五）。

蕭蓬父·許蘇民『明清啓蒙學術流變』（遼寧教育出版社·國學叢書，一九九五）。

劉澤華主編『中國政治思想史——隋唐宋元明清卷』（浙江人民出版社，一九九六）。

姜廣輝『走出理學——清代思想發展的內在理路』（遼寧教育出版社·國學叢書，一九九七）。

趙靖主編·石世奇副主編『中國經濟思想通史』第四卷（北京大學出

版社、一九九八。

苗潤田『中國儒學史 明清卷』（廣東教育出版社、一九九八）。

孫廣德『明清政治思想論集』（下）（臺灣・桂冠圖書公司、一九九九）。

陳祖武『清儒學術拾零』（湖南人民出版社、二〇〇二）。

王國良『明清時期儒學核心價值的轉換』（安徽大學出版社、二〇〇二）。

王汎森『晚明清初思想十論』（復旦大學出版社、二〇〇四）。

吳雁南・秦學順・李禹階主編／張曉生校訂『中國經學史』（臺灣・五南圖書出版股份有限公司、二〇〇五）。

馮天瑜『封建考論』（武漢大學出版社、二〇〇六）。

趙園『制度・言論・心態——《明清之際士大夫研究》續編』（北京大學出版社・學術叢書、二〇〇六）。

復旦大學哲學系中國哲學教研室編『中國古代哲學史』（下）（上海古籍出版社、二〇〇六）。

龔書鋒主編・史革新著『清代理學史』（上卷）（國家清史編纂委員會・研究叢刊、廣東教育出版社、二〇〇七）。

吳通福『晚出《古文尙書》公案與清代學術』（上海古籍出版社、二〇〇七）。

高田虔次『中國における近代思想の挫折』（筑摩書房、一九四九）。

井上進・補注、平凡社・東洋文庫版、上・下、二〇〇三）。

狩野直喜『中國哲學史』（岩波書店、一九五三）。

宇野哲人『支那哲學史——近世儒學』（寶文館、一九五四）。

楠本正繼『實學思想についての試論——所謂實事求是の可能な條件とその限界とに關して』（九州中國學會報）第四號、一九五八）。

植木野宣『清代重要職官の研究——滿漢併用の全貌』（風間書房、一九七五）。

岡田武彦『宋明哲學序說』（文言社、一九七七）のち、改訂版『宋明哲學の本質』、木耳社、一九八四、第五章『宋明の実學』。

同『中國思想における理想と現實』（木耳社、一九八三）所收、『實學と虚學の葛藤』。

高田虔次『大學・中庸』（下）（朝日文庫、一九七八）。

佐藤慎二『清末啓蒙思想』の成立——世界像の變容を中心にして（二・二）『國家學會雜誌』第九二卷五・六號、第九三卷一・二號、一九七九・一九八〇）。

山井 湧『明清思想史の研究』（東京大學出版會、一九八〇）。

——同・所收『明末清初における經世致用の學』（初出『東方學論集』第一號、一九五四）、『程廷祚の氣の哲學——戴震との比較において』（『中哲文學會報』第四號、一九七九）。

溝口雄三『中國前近代思想の屈折と展開』（東京大學出版會、一九八〇）、同・下論・第三章『清代前葉における新しい、理觀の確立——克己復禮解の展開からみて』（第一節『宋學的人性論の破綻——顏元・李塈の克己解』）。

溝口雄三「明清期の人性論」(『佐久間重男教授退休記念 中國史・陶磁史論集』、燎原、一九八二)。

源 了圓「近世初期實學思想の研究」(創文社、一九八〇)、第一章「實學概念の検討」。

同 『實學思想の系譜』(講談社學術文庫、一九八六)。

戸川芳郎・蜂屋邦夫・溝口雄三『儒教史』(山川出版社・世界宗教史叢書⑩、一九八七)。

吉田 純『尚書古文疏證』とその時代』(『日本中國學會報』第四〇集、一九八八)。

大谷敏夫『清代政治思想史研究』(汲古書院、一九九二)。

— 同・所收「雍正期を中心とした清代綠營軍制に關する一考察」——特に營制・財政問題を中心として」(『東洋史研究』第三四卷・第三號、一九七五)、「中國における經世學と實利思想についての一考察」(初出『中國—社會と文化』第二號、一九八七)。

三浦國雄『氣の思想史』(初出『しにか』一九九三年十一月號)のち、『氣の中國文化——氣功・養生・風水・易』、創元社、一九九四、所收)。

小川晴久『朝鮮實學と日本』(花傳社、一九九四)、同・第二章「儒教と實學」、並びに、同・所收「實學概念について」(初出『日本中國學會報』第三三集、一九八一)。

本間次彦「井田の夢、時の力——明末清初期の『井田』問題」(王守常他編『學人』第八輯、江蘇文藝出版社、一九九五)。

伊東貴之「中國の『實學』研究に關する覺書」(『人文科學科紀要』

李塏の立場(伊東)

第一〇二輯『國文學・漢文學』XXXXVII、東京大學教養學部、一九九五①)。

同 『秩序』化の諸相—清初思想の地平—」(『中國—社會と文化』第一〇號、中國社會文化學會、一九九五②)。

岸本美緒『清代中國の物價と經濟變動』(研文出版、一九九七)。

— 同・所收「租覈」の土地所有論」(『中國—社會と文化』第一號、一九八六)。

佐々木愛「毛奇齡の思想遍歷——明末の學風と清初期經學」(『東洋史研究』第五六卷・第二號、一九九七)。

同 「毛奇齡の『朱子家禮』批判——特に宗法を中心として」(『上智史學』第四三號、一九九八)。

丸山眞男『福澤諭吉の哲學』(松澤弘陽編、岩波文庫、二〇〇一)。
— 同・所收「福澤諭吉に於ける『實學』の轉回——福澤諭吉の哲學研究序說」(初出『東洋文化研究』第三號、一九四七)。

馬淵昌也「劉宗周から陳確へ——宋明儒學から清代儒教への轉換の一樣相」(『日本中國學會報』第五三集、二〇〇一)。

金原泰介「毛奇齡の陽明學評價と朱子學批判について——張烈との論争を中心に」(『中國哲學』第三二號、北海道中國哲學會、二〇〇三)。

林 文孝「中國における公正——生存と政治」(三浦徹、岸本美緒・關本照夫編『比較史のアジア——所有・契約・市場・公正』(イ・スラム地域研究叢書④)、東京大學出版會、二〇〇四)。

伊東貴之「思想としての中國近世」(東京大學出版會、二〇〇五)。

小島毅「二つの心—朱熹の批判、朱熹への批判—」(『日本中國學會報』第五七集、二〇〇五)。

張翔・園田英弘共編『封建』・郡縣」再考—東アジア社會體制論の深層—(思文閣出版、二〇〇六)。

林 文孝「顧炎武「郡縣論」の位置」(張翔・園田英弘共編『封建』・郡縣」再考—東アジア社會體制論の深層—、思文閣出版、二〇〇六)。

石井 剛「理を以て人を殺さないために—清末民初期における「戴震の哲學」論再考—」、並びに

伊東貴之「明清思想をどう捉えるか—研究史の素描による考察—」(以上、ともに、奥崎裕司編『明清はいかなる時代であったか—思想史論叢—』、汲古書院、二〇〇六、所收)。

伊東貴之「欲望・合意・共生—中國近世思想の文脈から—」(山根 幸夫教授追悼記念論叢『明代中國の歴史的位相』下巻、汲古書院、二〇〇七)。

吉田 純『清朝考證學の群像』(創文社・東洋學叢書、二〇〇七)。
伊東貴之「心」の軌跡—「理」「情」「欲」「禮」などの問題と關說させて—(『アジア遊學』第一一〇號(特集:アジアの心と身體)、勉誠出版、二〇〇八)。

林 文孝「耿極『王制管窺』の封建論」(『中國哲學研究』第二十四號、二〇〇九)。

Wm. Theodore de Bary & Irene Bloom, Editors,

"Principle and Practicality: Essays in Neo-Confucianism and Practical Learning." Columbia University Press, 1979.

Benjamin A. Elman, "Philosophy (T-Li 義理) versus Philology (K'ao-cheng 考證): The Jen-hsin (入心) Tao-hsin (道心) Debate," in T'oung Pao, LXIX, 4-5, 1983.

Benjamin A. Elman, "From Philosophy to Philology : Intellectual and Social Aspects of Change in Late Imperial China," Harvard University Press, 1984.

——同上・中文譯(趙剛譯)『从理學到朴學——中華帝國晚期思想與社會變化面面觀』(江蘇人民出版社、一九九五)。
Kai-wing Chou (周啓榮),

"The Rise of Confucian Ritualism in Late Imperial China," Stanford University Press, Stanford, California, 1994.

〈キーワード〉 李焯、顏元、顏李學派、實學、清朝考證學

※小論は、平成二十二年日本學術振興會・科學研究費補助金(基盤研究(B))「公共知の形成—東西比較による十八世紀學の展開」(代表者:金城學院大學・高橋博巳)の研究分擔者としての成果の一部である。御高配戴いた關係の諸機關と各位に深謝するものである。